
～ 謎沢劇場 ～ 未来・・・。

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「謎沢劇場」 未来・・・。

【Nコード】

N3278C

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

京太は、ある日、父親を病気で亡くしてしまう。そして、母も、浮気相手のところへと逃げてしまう。京太は一体、どうなってしまうのだろうか？

第1話 次々と襲う不幸

「お父さん！ お父さん！」

「すぐに、オペの準備を……。」

「はい……。」

とある病院……。

「鼓動確認！！」

「心拍数、75、50、どんどん下がっていきます！！」

「くそ……。」

その患者についてきた少年、京太は、手術室の前で待っていた。そして、手術室から運ばれてきたのは、目を閉じたままの父と、うつろいだ表情の医者であった。

「僕の父は……！」

その京太に医者はこういった。

「お父様は、残念ながら、心拍数が低下し、そのまま……。」

京太は、とてつもない気持ちに押され、病院を後にした。

京太が家に着くと、すぐに自分の部屋に入った。そして、そこで泣いていた……。

ちょうど、京太の部屋の窓の外では、夕日が落ちようとしていた。

母、洋子が家に帰ってきた……。

洋子は、家の電気がついていなかったことが気になり、京太の部屋を見に行った。

そして、京太は、部屋で泣いていた……。

「お父さんね。たぶん、京太という子を持って良かったと思っているよ。」

母は、慰めの言葉を京太にかけたが、京太は、泣きっぱなしだった。

。 次の日、京太は、母が起こしても、学校に行きたがらなかった。

しかし、母は無理矢理、学校へと行かせたのだった。今日、京太にとっては、憂鬱だった。何もかもが。

そして、つまらない学校を終えた京太にある出来事が襲った。

家に帰ると、鍵が開いていた。しかし、家の中には誰もいなかった。

「お母さん？お母さん？」

そして、机の上に手紙を見つけた。

そこには、こう書いてあった。

「お母さんは、ほかの人と暮らしていきます。」

そこには、どうしるとも書いてなかった。京太は家を飛び出した。そして、京太は公園のベンチに座ったまま、ただ、ぼっとしていた。

もう、外は暗くなっていた。

第2話 未来への空間

公園にはもう人影はなく、ただ光に照らされたベンチがあるだけだった。

そして、京太がベンチに腰掛けるところ言った。

「ああ。なんで、僕はこんなに不幸なんだ。どうせ、神様なんか、僕のこと、見捨てているんだろうな。そんな人生、僕はいやだ。でも、こうしていて、餓死すれば、神様は多分、大喜びなんだろうな。」
京太は口にしたあと、うとうとし始めた。

そして、京太はいつしか、深い眠りについてしまった。

京太はその後、目を覚ました。

「あゝ。もう朝か。でも、今日は土曜日だったよなあ。」

しかし、京太は自分が寝ぼけていることをすぐに知った。

そう、京太の前に明るい空間が現れていたのである。京太はその光景に口を閉ざしてしまった。

しばらく経って、京太はある現象に気付いた。

それは、その空間から何かの音がすることだった。

その声は京太にこう話しかけてきた。

「・・・こちらにおいで。こちらにおいで。」

京太はその声に導かれるようにその空間に入りこんだ。

そして、京太が空間に入った後、その空間は何もなかったように消えた。

とある未来。

「裕一、ご飯、ここに置いておくからね。」

母親が二階にある裕一の部屋に料理を運びにきた。

裕一の母親はこれをすでに五年近く続けている。

裕一はあることから、心を今も病ませ、そして、家族に苦勞をかけ

ていた。
なぜ？

それは、彼の過去に隠されていた。

あれは、彼が小学生のときだった。

彼はもともと、何でも出来る優等生だった。そして、彼はまた、女子から憧れの的になっていた。

そんな彼に、ある初恋の人ができた・・・。

その人は、一体？

第3話 過去の記憶

その初恋の人は、クラスメイトの良子だった。

気が優しく、いつもクラスの仲間からいじめられていた裕一にとっては、頼もしい人物であつた。

そんな裕一たちに小学校を卒業し、中学生になるという時期がきた。裕一は、母親から私立中学への進学を勧められたが、どうしても良子のことが忘れられなかった。

いや、正直、裕一は、良子なしには生きていけないと思っていた。

卒業式の日、裕一はある決断をした。

それは、告白だった。

しかし、当日、結局、裕一にはそれができなかった。

裕一は、気がそれだけ弱かったのである。

しかし、そんな裕一を中学になっても、良子は守ってくれていた。

裕一は、そんな神妙な心持のまま、中学一年の夏を迎えた。

そう、裕一に悲劇はおきた。

良子が交通事故で死んだのだ。

前から来たトラックが、ブレーキもかけずに良子を轢いたというのだ。

それからというもの、裕一は、ショックで学校に行けなくなっていた。

もう、裕一には生きる気力さえなかった。

でも、自殺は、とても裕一にはできなかった。

やがて、残りの2年半、中学には行かず、高校へも行かなかった。そして、今、裕一は、単純な二トへと変貌してしまった。

裕一は、母親の持ってきた料理を食べ、そしていつものように下に置きに行った。

下のキッチンでは、父と顔をあわすが、ここのことろずっと話をしていない。

たとえ、話しても、早く一人立ちしろだのいわれるだけだからである。

そして、裕一は無言のまま、二階の自分の部屋に入ろうとした。そのとき、裕一は部屋に誰か倒れているのに気がついた。

「おい大丈夫か。」

裕一は倒れている少年に声をかけた。

第3話 過去の記憶（後書き）

更新が超不定期になっております。大変ご迷惑をおかけいたします。

第4話 時を越えて・・・

「あれっ、ここは何処？」

京太は、辺りを見まわした。

それに、裕一は答えた。

「お前こそ、何処から入ってきた？そして、なんで、こんなところにいるんだ。」

それは、京太にも分からないことだった。

そして、二人は、黙り込んでしまった。

「そういえば、お前の名前を聞いてなかったな。」

裕一は、京太に名前を尋ねた。

「俺は、影森京太。」

「ほう。俺は、三峰裕一だ。」

二人は、お互い自己紹介をし終えた。そのとき、京太は、前の晩のことを思い出した。

「そういえば、俺、公園で寝てたんだよな・・・。」

京太は不意に口走った。

「公園に寝ていた？」

裕一は、聞き返した。

「そう。」

裕一はある噂を思い出した。

それは、裕一が小学生の時、同級生だった熊谷から聞いた話だった。熊谷の話によれば、今、つまり、2020年に発達しているネットワーク空間には、いくつかの謎があり、その中に人を過去や未来から連れて行く謎のプログラムがあるというのだ。

そのときは、裕一は信じていなかった。

しかし、今、このような少年がここに立っていることを証明できるのは、その方法しかなかった。

大体、家の鍵は閉まっていたはずだ。

しかも、誰かが、家の中に入ってきて、倒れていることなんて、泥棒でもない限り、ありえない。

しかし、この少年にはそのような気が感じられなかった。

そして、裕一は、京太に訊いた。

「京太。まさか、過去から来てないか……。」

それに京太は驚いた。

「何、SFみたいなことを訊くんだよ。俺は、2006年にいるに決まっているじゃないか。」

「違う、ここは、2020年だぞ。」

京太は、裕一が嘘でもついていると思った。

しかし、壁にかかっているカレンダーを見た瞬間、京太は自分が未来に來ていることを知ることとなった。

「どうしたら、いいんだ。過去に戻りたい……。」

京太は急に落ち込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3278c/>

～ 謎沢劇場 ～ 未来・・・。

2010年10月9日13時47分発行